俳風柳多留 十

9
1147
10

10

門へ9特
號1147
巻10

帝國圖書館藏

他書出版セルモノ
昭和二年間ニ出版セルモノ
拾篇ノ多ク是國史ノ研究
有益ナルヲ取法シ書肆ニ
ノ秀作ト家ニ張サンノ事トセシ
性セ流ノ略シ好士ノ参考ニ
紀ヲ物ノ本中ノ書ヲ
南方熊楠ノ著ノ
大書セ雖ノ南ノ

不二と書くと書くなり　青竹
十枝と目の夢ゆめ　ちゝへの事　濱十
いとゝ酒ゆゑ酒の奥の酒の気代　東車
稽古さ初ひまつかまとゝ入る　拙子
門出のすゝ出ふ出ふ姫の礼　歌吐
十ッ中ちゝとおぢちゝ出ふ　義曉
ゆつゝるの躍ひら礼ちぶぶふ　象香
家のゝ出ゝ男世界をしでやも　賊狐
九千巻祝うゝ附松ゝ　如雀

如房の知ふふふ遥とかくすく　春蝶
連てゝ歩ゝ下世中姫ちうゝ　桃穴
ゆらすふびゝ声の変ゝ　秋紅
蒙ゝ河をゝうぬ牛なり　一目
姫のゝ人生碎ぢちゝ分る　宗河
姫入の時も泊ぢゝい荷がおもし　仝
十かえゝの変ぢゝ章ぢゝ口　未徑
市ゝ寄りいよゝつゝふりゝ　仝
姫ふゝ出東西ゝ天ぶいや　如雨

琴の音も止てうら悲　春湖
月ふかくなるまの梅の花ぐもり　紅梅
けふ一日さんぽ日の面やうり　芦舟
竹で泊めるを紅花が牧やと詠　蕉子
世の秋波づく新してうんて花　蝶
世辭とふこと書ひとり　風尾
波面の琴を弾人　小川
くへぬるこうえてすると酉義　芋舟
を交りけるを南四川　石戒

永濱の書ちんでくれたまら　仙蔵
門書を大坂を立てあるうり　金蕉
ぶらぶらの春一下は歩き　雅楽
死ぬ〜思ひすら〜西書をひでい泊　眺柳
ちゃちゃと指ってゆ　石ようを　彩紅
切紙ばかり泊を泊ぎ三ッやうん　象泊
合さいふ泊ぎ　樓投
ちゃちゃ合世界ふ　宮泊
陽ちうふ新ての人ちゃ中の町　鳳江

なの年のひなまつりにあ
たまつて二人ぶんでのつゆはら
大ぜいすかして松魚を寄くする。
おやゆびと長く入れるとひとりひ
とり通り抜けるぶんがかたち人
だくさんな振袖の出るかるた沢
下せがあるくおもんはつちぶかなやす
せ門と沢ちく寄場所ぶんせん
ゆうぶんの長巳せぶんらぬく

手鞠
振袖
雪
万年
吹雪
彩紅
面膜
敵吐
蛇蝶

二年紙蔵人として姫ち紙
沢ぶも有るやうに小倉入法ぶく
鯛の五月人ハ五月者る三人有
下ぶ下ぶ三人ぶ三月ぶ掛人
下せが白状大せんのそるぶく
吉原ぶくぶ舟振はいかさりぶく
ぶ話ぶハ人ぶのぶぶかぶ
人ぶくの長ぶしぶハやりてぶり
市ぶぶとかぶ沢ぶも有る去ケ器

乙口
沈紅
糸重
芸舞
重姫
万己
万融
蛾宛
彩紅

正の為海ふけるふかちんぶり　文仲
云葉多くて所〳〵に加あ　奥文
ぬけうつのいろ川ら出るひのるす・仝
田ゐハ田でさの一むのようなりゝ
海ふと出ニやはくく小ちん舟　高海
物産ハ才ものかふも志海山　底　取謹

海ふまの春

ゆる　早蓮寺
柳助　さんぐ

髮毛ハ白髮のようをはさんしの
ぬりうつうちゐ色ゐ〳〵をはあ
中宿ハ義経ぐ初通二日　ちさ
ゐびついて居らと女房ハさあんく
さり怖を素ゝと文舞ちん出さ
入りハ為ゝさと柏逆ゝ明ほ
初ゝ来ゝ来ゝ所ぶのぶのゝの出さ
ゝんゝぐゝと文所のぶぶかんさり
雪沈の下女枝のゝひふとゐひ

此扇の流り此小ぎりころすく
此店のおて為遊く気との此せ
揃いのお太合羽屋で売られる
やりがんどうぐして売りつけ
ちよき舟とらんしるやりお茶
大門と一合ゆしくふおりり
ちらしゆもかるべき浅草じ
送り膳ゑて病人とらがくしゃ
年忘かづおがお扇の岩をげり
きんのきるみもしおもくろいさめる
九大店路とかしき巳をませれる
菜ろ種ろがいおやすらか勇八盛
銀子せる芳ましんて出てちからく
大つりざと思ひさ映りまつり海り
なんくるのぶしやおんと貸て我
夜見てふらんしかけり秋文の華へ入
草ち文掛まふさらるかのこと
なんざると在友ちんでとめ所おかし

おぐ幸もうつくしげさまを屋うり後
世房の毎年はかりくのんて結
ゆうしりくしゆやゆ世ハたちを至
第ぞうしおうぐ法ぶさふやと
ゆうさしりてハゆのゆうしりかう序ゆ
ゆを縁くくそうせる嫁出まうく
下ゆうり有と毎宿ゆううを
すぐうを接義くくうがくしゆく
をうくを見へを深くを書てハ就ゆ

反感奇ひ見へ屋ちを法くくゆ合
ゆくくを見へせてゆくゆ一うを
まゆ白かゆくを写いでかゆうをう
ゆうを高へ見るでゆゆ石言
文義年九ゆ三申ハ世の意然
能をする間々おがくひんむすび
十四日ゆぐんをうる山へゆゆ
縁てやるゆゆさ嫁ぞうゆうき
ゆの筋を接ゆの外へ出てを

源之位大さ[illegible]紀志を[illegible]
花の山いまぞ盛りぞ[illegible]
おもしろ[illegible]
之次キの巻[illegible]
見[illegible]
旅のうすのとも[illegible]
すて持ちぞ[illegible]
十三日[illegible]
[illegible]

門すぎ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

中納言殿の女房と世性と二人ともに
正寸格別にて優劣はなかりける
ふるさとにあるとも心ばせおもかつ
おもしろしいと男ぶりして侍べ
山賤くはしく樵の思てなし
花ひらくこと世と世とを
姫の祝りやうなる門の表
門をたてうる張ひうん
おもしろ人おかつくる
ぜのむざ世男ものつぎ
ものとくおもひなしのぞきいと
ほめもてなされ気とふ雑乃を
家とりくやしかやこ汁いと
ものを弟とせけふ産ていはず
打ものこをかけるかつさの
ひざい津ごぜやしはすぐれ
汁粉をもつ出くまる就の

[illegible]せいすぎん[illegible]郷をたいらん
生辞どのつのぐ毒ゐ。おさの夜
と〳〵こゝそでもぐ[illegible]
春すゝやもやゝ[illegible]数入ちゝと出し
ゝのむと毒ゐいの布の下で死に
乳すするもゝ沢十九て袖を物り
ゝ用ゝゝりの姫いゝ[illegible]
ゐ馬ゐのゝ[illegible]ゝて つさ有り
ゝの[illegible]ゝ姫かゝ城布
雅のゝゝと下ゝ[illegible]ゝ[illegible]出し
ゝゝゝゝゝゝゝ姫ゐ光をかけ
ゝ金い落ゐゐゝゝゝ[illegible]ゐは矣ゝ
ゝゝゝ牛の小面もかけ者
ゝ後板ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ[illegible]ゝ生辞しいてゐる
袖おやとゝのゝ[illegible]
ゝの姫ゝ[illegible]ゝゝゝ
姫おゝゝゝとゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ごさ声で事のうてのいざるて行
甲斐やうるそじでそをりぼうとし
源の妻子のうは絵といや、うしき
ゆのを人家うふ、ど嫁さ紙あるぶ
御さ面いすそやは方しそはゆいひ
ちり社とおさくそらどせはそ
と沼ゆこがうはの様のそづふが
やさそうはうちと横こて四一しる
ひとゆと牛屋毎さそぐらがり

藪入い妻は泊りとく出さうれは
ゆ沼う牛お成ゆるさゆ沼とおは
酒屋のうはづかん大屋形り
ちさ居さと屋うんとうたは湯
氣ゆえやんすそりかるかうん
ちくをとおくを馬るのいさはう
地井ゆ源すてゆ一宗うる和
むゆいさものごうおう蛍源喰て雪
ちをを一ちを人ら嬉ーかを伝沼西

是をとりてみてゝおつめかし
母の乱と於しうことのむすほうもの
下手の御手拙わるものゝ荒く於んさ
御男ハあ御いしと後来大丈夫
政宗とくらべことめるかつこうけ
之よせん於くさへへのぼりおりら舞
御らしだ御さして手ぶ之ぐらく
生餅を大六ちんと之んて居る
役らどもあてをく出るが下世ハいや

の御姉川あおくかハいとあい近
出来さゆんさくへの出てちやんと居る
前一ハ孔次でやるさりおもし
むさし番とむきてたんと帰て居
体役がおめると御用婦れ御うさ
そらくとむ始為而しぐりす御
あおのう来さと役んおす病より
不為ハさん小二口さりうくる
断人ぐあら金を出るハむどいや

生男とも呼ぶべけれどもこれ
中綱云ふ所の紙とぶんぶんる
ぶんぶんも二文利口は出来り
人るの如くなるべかりしかど
だん食のかたち亂れかくれ
ふ事なるべしとて初面一の海
苦しきのは馬の腹をうけらん中
乗りたくのはいかびはいかとて俗
たんのやうよりおもらるるはなほど

大なるせで呼るはあれすを取り
なりしかしはんをとをるさるてり
呼ぶるこはいかかの母をとらま
かの海家ざさ海すと仲人の
なほをこ文かとりでらをかすが
ふりさ一文りは石ふ英しは
親の気かなるとはなるるあ
たんかんを神さんを合す拙やや
年系ふりも同し拙ふ

料理人切合ぞうな音ばかりさせ
ふんどしの海てくけいせんたくまる
国中ハ殿ぶ元しんすしはやて亜
時年おそ元んざのまんにたく
大元こハたまハえんさぶ神奇ぶり
ハ織でもりふ元ぶ元ハ殿ぶ世房ゝ
松うらとくすた時ふハ絵ゝおゝ
すりまハ小すうんく売引て年ゝ
おゝまとらるぶと田ハたのうまる

年神ハうゝ海ばらしの物くうと
ひゝけとさうぬハやまと原欲ゝ
旅ひゝハ海しゆゝ新ぐ掛ゝさ
ふゝうゝ行ぶくとんぶ不ゝ旅ゝ
誓うさと一年ゝ新ゝさくゝ一ま
ゝ海さんの一日ゝくぬまさ賣
原りハハゝぶと海ぶりおぶゝ京
元仏とぶゝ月ゝひすゝがゝ月ゝ
二月とうけてしぬハいさと海り

く成めるがうる湯のはさがうるでふ路もめ
ぬめう一も金絶しけるとあ戸でゝ
そこ板て下女いふれて迯あげる
妻りが座で奥ノ様じの○とつらくする
久き来と七日見つける推司若
至がどりく事くと粋理人
広屋うつくせへのといふ書向し
そでの花へ秘とたいこと延てくれ
河海川子どこ出んの若イかかいわ来ル

当ウ襟をう引縫ハ擦が有し
囲レ一髪のなるのが来てぬすく
大かくび枕の波珠海と見付出し
県足形のハ鬱の出さ男好り
次の君ハもに小切こし粋理人
主年こ泳しかけ合十五日
平て多がとまて二階がさしく
むらりかんむつやくし風小産し
そくかすの稼ルでこまん女あかり

にを門そのかく者のの門さ
なかり年始のるぶが一ハ出来
ち町へ世話帳ようとい宮が紙
弟はせいハ上日向さ器どしとい
ばくどんぶ元てて居つぶ弟いけう出
しひぬもとうんぶ女房ハそてき
ぶがんぶを始へで見てぶ書れる
えてぬ書ハのとつても居うんく
でんがくどちびくそぶ女松

和俗の結イ年と筆とし
ぶ元ぶけしり思ハる杯をれき
商ニ人の左を梅干かくおは
ちり紙ハ海うり遠やく出ず年く
例年のちく田ハとどく海く
上下ち年を三とさて山田の
年これ紙ちひ変でそく
御紙こいハく又見ちをりる
ちんとはく決ハも姫二人り

屋敷ごとのやまいく出やすく門義
しのの名ゑと三つ三つ行やー
興り所すべ出ごしりくこさんみ
合の有ル所をめさきの下てしな
世伐拾ゑ人のだ海ん七大三十目
此毒の声うらごりのちとぶおち
三人せんを始うとうと毛ぎ〳〵
ゑこいの舌ーーぎそごの汁を出ー
形及い茶人妙のすもひ海ん

陸ゑくをとうをて中解長伐ゑ
おとぐらのそごでゑをゆをてこせ
そそと陸ゑぐふ汚毎かーとつき
絡の異代ゑりゑん毛者一陸ゑ
陸一筆ゑ蝋と古ーくゑつきる
ちいの赤伐ゑびあるゑふ粒毒ゑ
出ゑーーゑ陸押とおごゑく
細見とは書ゑんぜんのゑーかゑ
演芸ゑくゑんへゑをて中金面

大ぬのでこさしかけ
柳うゑ　家とハどう
なるいハおさりやせん　世界やき
海さへ地しすいこそ　えのが剃てくる
地こがくハ様の中こゝろぶり
京かこさこの剃　さがざりく
時ゑ　ゆくる日かしハ　一ゆき
たらこのとえこそ　小見こそく
ひまい事らこゝ　の神へ　絵仏作
初ゝ作ほかつゝご　海で見せて居る
志ゆ一　絵のあて　たる絵をゆゝぶこく
作者の　ゆあて　見こて　ゆこ
あいせんの　機会　こ人　目かこ
ゆ又でこ　しの　心く　居こ　ゆん
くこゆて　作ゆこ　ど表　ゆこの
こ命めこて　こゆ　く　こ作こり
乳りしの　芋と　ゆて　ゆこ海　品
芳の　若ハ　花ゝ　咲　月　ゆこ

四ツ橋筋にて見てとるに心しらくし
そもくぞのらんをやうハ義理と
海ゆりも四のそのはがれんづを
をなとをとこかゝ神ごとつゝく居る
馬ゝ忘れて毒ひかくなり
そもくぞ
下ゝの編かをの波おとおく芝居く
嵐くそを請ゝ神いおしいゝ
ゝ川をこゝ以ゝ身ゝ節をする

日と思ゝ夢代のこゝ行をつゝ西
ぞくかをの中毒を祈ゝゝり
右ゝ迎く第殿とこゝ人ゝ遊
こ男ゝもゝくゝ法くぞゝゝ
入りひゝハ見ておゝう迎十時
ゝ法さゝゝ小節ゝりを立ゝる人有
故ぞゝそゝの迎と筆を法ゝ
他ゝ事をゝもせても世房さゝゝく
ゝ川ゝ結ゝハ節ゝの男ぞ の

の波はやしの一日[illegible]
明日芝居へさしこみを利く[illegible]
くるまを馬[illegible]のやしきへ迎ひ
おりの道[illegible]
波しまとかくはなし[illegible]
男がいいたのびかくしの間でまく
せいぐんしゅうこうい声山[illegible]
ひのう出[illegible]
後見一口やけをおもしろく[illegible]

[illegible]
初しつは[illegible]
くるをひきのやしきひつぐ[illegible]
[illegible]
てしとそ[illegible]
[illegible]の定
[illegible]
初[illegible]見へて[illegible]
[illegible]

かせゝに印子はしけてくれとて
世虜の人に給ひ苦手こさんでて成
席見足らし妻はちえが色にむる
大和屋りし下駄と切って目えく
ねすられて殿のまんさゝんで居
鎌倉門纏もなげに二とせ居る
石塔と見ちめくかきんは藤おそり
ふさ隆りに白衣足袋の雲やうは
光れのさは蓋も蔵が二つ三つ

果服店二つにさし川人通り
夕めしばくふ間えて居る台
ちんむ切屁のり出しさいさと入
麻さぬらるゝせし者にする若イ衆
茶心の葉るくます門にて
隆り出ほしくそぶと茶てんゆるが
それその二ついとかして振りお酒
君の膝緩ぶん座りし薮髪おさ
精の法らは丸急乃糸が訴へ出し

本の個をすこし芝居の幅とぼり
格子かりぐんちゃかつくるとかりる
二段目ぶハ姫くゝ通るいとし毎
毎見せく馬をかぶくへるひまぶ
かさい者のゝりとかりへ考るこゝ
茶物ハくゝとしてかるもにぶ
はゝ縁をおくゝ風ぶさえ琴も聖
いつい事姫衿えゝとくつゝ
ものどりと見へもんゝとらぬ

ゆ鶴ゝ忘ゝしゝやうしぶとくつにゝ
はゝ毒のゝ茶ゝ茶ゝ分袴の奥ゝ
かぶゝ思くゝめものとるくゝき
かんさしとゝゝかりかりかりくゝ
家ゝ有ゝゆゝしひすめの門源
ゝゝもお茶ゝはゝ源家へゝのておすを
ぶくゝかゝを中解ゝ武把ゝぶくゝ巡
ものくす、武てくゝ辻答さぶる
茶かくゝ姫ゝ男紙入しをぶり

玉猫が居けし蔵り むかう迄とそ
緑由にもしもで 語りきせぬ
妙風くり 塩ほどはふ古 かん釜
むかしの蕃人乃 宰とうそふかり
河中やともうし後家の伏ちおい
にくる朝職乃かえる縁さまん
台中にさまぶとこ伏はにいまく
わうしるや娘人かうと訪ふゆく
いふ海ども口上女房 連し入ひ

きうりの治りもうらで甘からけり
は花とおしむかし汲うして 石脳 男る
おめうけの詞 酒は 毛抜 きくく
おやくの肉義 ふ動に 給って 居る
蝦とやいう汁で ふうち波ぬけり
かまの乳じゃや えんふぞして 姿うし世
法ほし 古器を柄へて 汲るのころ
壺の肉 さうまて 恭るばて いふり
秘さき喰 さがうら乃 ちまちしく

ゑどの市やにぎはひいふばかりなんとも
いとゝ心ぼそさのまる大三十日
石葉見をいかにふりしいちやぢいひ
無右衛門殿へ歌を綴び
物語さ大盛きうんと和とかき
おゝ九でやもしくとうてんがい屋
二三人まらくそうしうさうさう
又瀬ハすうしていはふそうはう
くいつくいハ者く夜の人が集てゐ

法師しかやさう取うまとうせ
ゆいそうがうて採菊とせしやうを
尤右衛門殿ハ小姓の人を招よ
そうらく御所がお客のぶ酒よ
旅うへ世界てつきやう伝
世解を捨くもの形り
あいくつの中を流て不二の雪
うはぐんくそうしが茶をそび
拾ふ金かうさん命とのうまそう

ゆたく礼いとまもなく
おつうさんは新でまだいたらぬ
ちと四のゆくごとくなる者ゆゑ
年礼は一ぱいすむ　金の事
初切て居るとおやくろをなす
ひとさしをおめ〳〵ゑがへすまで
かくるりハおもゆる公家の上へ為
傘ハさしかつものむちんぼう
初人四人迄拍とはれおへとうる

四ちとさすやせいかゆくるこうと
ゆうこそのまうぐらぐんと迄うける
おがんぶしの雪かゆきて滅をやや
此彩迄こうもでらうと一ワリさ
赤だやまてこまちをゆんがおぎさや
ちゑ滅へだをとうきて　大小云
仕立屋のでつちゆ茶屋の格とそうい
ちぎちりハどのがきめぐをちゑ
大石〳〵ゆかをおさんををいて　ゆる

山寺やどめへ汲出し枚をと当へる
団がさめて見れば汲ば書きし無
念と激き力気抜けんとして請と為
山孫出紙が当りしかハ千鈞
由しこふく始ると師匠も見くる
君も来り見るへ好ハいら然るの
大人形ハ二かいと思わしく寵ら
兄弟と泥とまいてとあまりの子
おしかのもいくぢハやむし汲ざる次

此ごの来り合ふ来たしあまり
茂指ハこかんふたしめ様でぬるき
ふ乗ていしおかうり子大し汲
此川の月ふまらしいた紙紛
抱さしてえんめりかると二つこつ
奈かゆる仲間へひすみ汲さ通てと
子供をやく喰ふ指喰ふてあさしたく
流さ出しハ言てちんで来さのく
多いこゝらお汁のそばふ出るらく

芝居でも見ようとひすまを大ぶこうあ
仙又きうくいとりつけて赤のまいをらを
ふくさ懐紙つみかなめをせくをつまる
芋一かうぐ紙くずをもてくらし仙
ら海人ら赤しも被り売く
ほうまどばかり関おくいぶくさ
ばかくいかーいと上くぶ礼世ぶ
ちづさでは歳を吹ぶ行でな
花嫁かいくも厩かぬり

海ぶ松をやむがしとひすめくとかまる
くふ紙でやまでそを絞おくくまん
柳ぶをくいは赤くいとひかぶず
ぶくんぶて垂くくれらくまをひと
ぶかんをさ手ふるかぶせをぶら
下弦をくをを極くくきくぶを笑ふ寄
さのるくなは 北山でも二家ふあまを
ほくくきくふ形ぶくひまきを分く
本絵屋でおくのはおーい男吹り

風とぢ立ぐ通す御いら
脇のえうくるとのそ
ちもむすり
ちくん長く書記をいる紙ち
三川浜拾る黄しふ中浦
後ぢくがりくしみ十入
おとぐろと碇ら海浜のゆ笑
さうやきでおするハ二又ハ又すり
ゆさ見きいはるえ小らかき
味噌と浜くやしふつ浜る裏たえ

世ら流てかすがしてこ子をもおとそをき
ちしすぢ鎌ハ目時ゆとをぐつちら
立長拾茶ハいつして垂そうり
紙中の立長下ぐんぢりゆ浦ら
通人ハかりて三井のゆしを食
梅組よ出形ひゆ也ぢぐ浜そよ
ぢくとき三ら合きくかき長
ふぐ汁の表をぐつが立ち仏
立長拾ちんそゆがぢさんへ

ひきてたちさいハ毎日通りまし
琴若をかついさ社へとつかひり
ましハふきらさんと一重次きへ出す
すれど春ぞやと云へと紙文もらふ始
ひと神とかりよまい毎へ始り集メ
関和て赤ヶ子ら小屋る元ら元
石角と為して言がいと文く
吉の鈴世房ハいハを持ッて知ッ
阿弥やきらかなし法師迷子とい

ちくむめくいつるものごとまり春
恵花ハ出もさ桜とやをてけば
世房ハやうはがくいづれく
お四ちと元とは為やまと角と望
日花ち面もちい迷法帝
奥さ面とちやし城力で切ちびけ
世房のちえハひんちるを春ら
竹ぐさへぬいとさが姫絵御友く
出けらくら札が白イてハけらぬぞ

美八美さが五四寸若い方んから
百人を解くもくかくすもひ手傷
拵をひかぶちくの遠ふらんかさ
矢を訳なお若入ひくくヤ　ゆを
ひんくんくを　をくにみ人うを　のもり
弟ひせいを弟けで法出すひおいす
加弟を五の弟ひ　ゆが精吳ひのちそう
ひぐうぶくを尾ひを書の紙をけ
ひひ云ひおやぶうをを出ていうを

墨西八ふふくく表ひ方ひこ
ふふんとうをくんで法ひを
ひ四ふくひるくを官出ひはてふひ
ひ福四ぶはけふかぶ清月拵する
ひ付ふふはぐせをしいるでいひる
見八ふく美ひるくるくを拵ひひぶ
拵ふいひ人の弟るひうくを世弟
地安をふぐつくを五一ふうり

けはし女男の契ハ始なり
物事へ江しきしかりける世あるなり
去んへあつきし流のハ女房なり
誠世にあて他人に義しふむこハ事
是宮殿へ二表のほらハさハ華
訓すいきまゝをあこし後しも
おりにしあふこゝ栄せし母へ之
結春ぎのとハ大きハ中社丁
清指弘ハおあふかぜさすこ円

華佛とやうく宿へもあんせらよ
いよおびく屋し荒後所いやこうて世
鬼の国都らさぐとおつほ為我の次ん
清らハ界浮国義すこいて絶て着
無無しのも異清あもなう へある
大きぬり一下堺祖ぐ示他とする
ふり神をちくやの所へ出し画
一ハ弟をおうしきせる大をとぞ
ぞしちくさり山浮りさ後人のよろこ

すがたきの中てい種はうちなれさきの
糸と巻やうふかい姫をちを喰イ
さぶまてうちるおんぼうと見て世人垂イ
いてうすうちうのの拾三年ふうち
ちんぶてこてれ海ちう鳥ちうさ
山のあぐんぶりやちやの方へ行
元せんのちうりの撥義うかん好
ちうかぐとさうやおうちるをを
海へさうい海ちやうたいてちまでい

見世えんきで能かうき合結って居る
不了縁のあるやうふかう涙三位
茶屋元元元元て形ひひ形
切りかうぶの上へくらうのちうん飯
ちうく色さかんなものを出合茶屋や
出合茶屋縁ちうれて最でのしいい
ひきうてやうて受けて等ふかう食
初うつ四行永ちうりへ拾すり分
能すいでけううきてちんむさ

須ゝ声がおもしろいはえでしきりとろく
そんきが首をおさきおつゝまれる
あやまん(へ)きるほどきらの塊かしさ
此掛がずれかしくしやておけり
通りまの猫の名国とを沈見て来る
すいふいくを急ぎて行膝州
関ちの不化流さんあてもつけて居
女を連てのおそいい判さ騒まんよかる
抱そふふ下女の着くへ巻練る

やられるでくさくすむしかこいいひ
いまく田村の殿様があしらはる
辻妻は御酒がまゝみすがりゆくき
とりかわふふらふむつさとことかけ
まかい性此国ろ関ぶるよりへいそ
此ので智る東海道をさして加る
不二の姿をしもして白きれ無るなれ
船をうかへて一日あはいたのこと
廓まて舟くいのいぞうふせいさ

ぼうし計さしてあるしかのようをを
人ぬるしきんで泣いてさ、のさ
ゆいさんしかつ男とのせて
ちゐの海ゆ中ぐさり松まろく
紫ぐ都とすてるず色さ
姫の礼おくずしひをぶるしひ
そぶのかんのよくて白い接とおで
ちんのやきんくいるかゆ
森ぐをはしゆ海ぐ

きん海ぐてひすあらやびとそひく
四条四士弟ん今祢の身ちゆくく
遠り脂焼くの金紙蔵て見く
夜くの四方の少房ぐやくいとそひを
口をすくちくく忠綱後しひ
光ぶふぶふ年ふお熱
動月花鼓入花御はいひさ
伽ま行くで干物を焼匂ひ
大和茶ぐ紙そう、ぐをお

里の姿かげ無常をもとかなり
かんぶしを泣くよびでかなさ
はる都中ハ坂のやうなる廣小の
路幸貢ハあさいねぶと光ひ
おそらしさそのく喰ふ吉の空
二のたもおぜふ幸いきらはるをすれ
川岸ちじりんのかのハさそうれる
ちりはちらふふとんで四ツよ一番の米
弩の庵やあ川うち声とかすよ

米ゑ流の有りのとやりおさし
指来金見合小出るを行るぞ
丁町おやぢハいをよそ人商て行
結りの絵ハぶてかさやうを小吹
かけうとひ合ふうを元ともを
是小元ぶ云ひするハかなり
降り川てハ廣るを元ふよ聖乃
石へるぶ幸んさやう花ぶ元小ぶ
てうち人ぶ消るく川さかさかさ

四つ手かごすてかごの内をさぐり
そうやくとせんとくとくきはかりのに
おそふく底をさぐるに人を入
見るに目の毒しいおらかすゝん指
をつくしあらかぢ出て忘るゝ立て行
大新屋の石垣そのいとゝかゝ
かゝ者すりおぢらのすぐる掛人
かゝ人ふかさかしたゝあみくの船
お性小ぶし討着しゝんする。

せちがらひやけ数いきやふりせそう
きくつかすまてゝ用ひ
なるものハ四イろてすむ石具く
紙中と云ずふのうち玉のゝ子
ゝかゝぶし喰小ゝ市ふするかりさ猫
ゝんぶやうの毒をのどしのしん女
ぬひなつゝハ三ヒ人て婦ハ毒
あるゝやとすてつもてばろさひ毒
ひゝて立ゝ門でハ立ゝと立ゝ

さがりうりに屋人とあらそひて先此
ぼんを義へ横ちりくにうん山
引つまるうつ因義ハ志ゆけ一
ゆきはい泡りだ門うりたそけうき
去うとしれうし泡門ハ月の泡泡
すを当ハ義ゆを世ぬ門泡こうき
さしびをあ一ぼいうとうけうきき
ひさし泡をうは泡で利さ泡ん泡へ
泡つしめハはあ光メさし根泡のぶう

いさりうりかぼ屋おぶへ稼るうけうこう
ぶさしふうりぶ門ぶと喰ふとていー銘
仏眼てちやんと芝、居る不世の敬
芸うつものがきさ芝りてよかは泡
美しひ銘どくぶしてをとかけ
称このうをとしくしうぶ蔵うりをる
泡芝うきを泡て泡ぶを洗て加けぬ一
計うつとぶ死で一日見世をうさ
世泡泡ぶきのうものはよりし二年

十二文程ごのこまんでけさら出
賣りぐわがふくで英世はてもをキヤ
網てわゝ仲光をさゝらゝ山
仏法の事ぐこはいるひけて
下ぬがやらが形ゝ馬ふかきの世る
ゝゝさるれが一貝すゝぐこゝふゝ
野海屋ゝらかゝ世房ゝ
山人詩の詩を
おゝ形花樓の中ふゝ

目なのゝいふんぬが婚一ツ
百人のかつえぬ婚ふゝゝ
ゝゝひすゝさ目さ婚の中共ゝ
ゝゝゝふ大船をゝ出ぬ
金藤風ゝふ
ぬんぬゝふ出出ぬ
上下をぬぐゝ
面ぬゝ汁ふゝ
名のゝ円馬ぬ

[illegible]所でふうくと合ゝさお城の[illegible]
[illegible]ゝさだりの[illegible]矣とすゝ[illegible]
[illegible]屋ひまゝさうりをぬぐ仕[illegible]
おく[illegible]橋をとゝぶとゝ[illegible]
[illegible]ゝよゝ初てふ[illegible]ゝ[illegible]
ひゝさゝかゞゝ[illegible]紙のかゝさゝ
[illegible]ゝでゝ[illegible]刺のふし
[illegible]も日もゝふ[illegible]
[illegible]ゝさ紙ゝ[illegible]見ゝ吹[illegible]

すいうんの門か[illegible]
[illegible]屋か[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]小一日つゝ[illegible]
毎〻物の[illegible]和濃のつゆ[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
八郎をゆゝして[illegible]

あいさつ抑ハ此年ゟ三年ゝ
九月九日之義の為ぶ義ぶ
ゆゑ[illegible]十四郎ゟ云イとゝく
やうに[illegible]で庭のやうゝ茶を売く
後家ゟ母ゟ[illegible]
ゝゝかゝらぶ[illegible]
母の元ゟ行いて[illegible]
やうゝゝゝと[illegible]
二ツ三ツ食をお[illegible]

春ゝ身ゟ小也ゟ
今ゝゝと出て羽とのゝ[illegible]
ゝ[illegible]
ぶん[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

庫の内へ入れて此紙に書
きしるしたる地紙を
柳橋やなぎばしいとかへすがり
門かど、松屋の本とう一さつを
大事だいじに入れて志賀しがへ
帰る、帰りの道すがら
四ツやよりの茶屋へ
寄て煙草たばこ吸ひ
ながらのの帰るさ九

ゆらでのかざり竹をかき書る
京しひ新てい
いろいろおやぶん声をとり上る
動面の門おそやいなこと小
竹べらを叩くし切ら色あじを
係面はいまを変てゐるかり
四合板車も落らうゐ
四人ふちまい水をうんな
おくぐちのはさを左右へ

甲斐の田と城坂の強てかくれ
候ハ〳〵ふ屋人ふ名ぶ〳〵筋て云キ
抜くちかやうぶ〳〵鍛やめふ
さらぬ〳〵と男ハすれ〳〵因義せし
世房と〳〵かゝ〳〵ふ〳〵さきけ
ちをうんハ〳〵面〳〵〳〵光〳〵
初名や出さかゝらやゆ〳〵出房ら〳〵
無名をけるゐ〳〵ふ〳〵出て〳〵ひめ〳〵
かゝ負ふゐ〳〵出名事　さ十七日

俳諧風書品目録

江都上野山王文庫　花屋蕩次郎

俳風柳樽撰上冊　川柳京句調時代名四季恵報好事録作者名称ち

同川傍柳　森川柳良　ちゐ三三年　同やすひ篇　三川柳良　二九年

同柳句種角文連柳篇　六編嗣亜　江戸五文字柳句鑑良者　恵ち自等南〳〵押物著

[illegible]

同角文字　元文庵生蕩角と俗　柳ち生蕩江戸山良　同百〳〵家　雖芭俗　山良柳ち生蕩

俳諧[illegible]